

(6) 2017年(平成29年) 12月21日(木曜日)

イエス・キリストと呼ばれる人物が歴史上に生きていたことは、否定することのできない事実である。第1世紀のクリスチャンではない人たちの書物に(タキツスやヨセファス)記録されている。新約聖書を構成している4つの福音書や、当時の信者たちの手紙、歴史的な文書、預言書でもその名は中心である。キリストの生死と復活の結果、歴史上に残され、今も残っている幾つもの事実がある。

すなわち、発掘され考古学的に年代が証明されている碑文、教会堂の遺跡。キリストの直弟子たちの書いた物(新約聖書)に加えて、その後継者たちの著述は1世紀末のものから2世紀、3世紀、そして現代まで、連続と続いてい

る。信者の週毎の礼拝も、2000年間途絶えたことが無い。

さて、世界の20億人以上のクリスチャンが読み、天よりの啓示の書と信じている新約

命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることにな

南加キリスト教教会連合

大詐欺師か、精神病者か、

でなければ?

相原 雄一

聖書には、イエス・キリストが、自分は天より降った者が、真の神である父と同一の者であると明言されたことが繰り返し出て来る。たとえば「イエスは言われた。『わた

る。このようなことを繰り返して言える人を、どう理解したらいいのであろうか? 自分の嘘をも信じている詐欺師、それも大詐欺師ならば欺師というものは、時間の問題で本性が暴露されるものである。キリストは3年余り弟子たちと共に行動し、多くの場合、起居も共であった。彼らを騙し続け、2000年間、多くの学者、論者に虚偽を証明されないでいることが可能であろうか?

もう一つの可能性は、キリストは精神を病む人で、そのことに気づかず、誇大妄想の主張をしていた、というところである。それに弟子たちも気づかず、3年以上信じ続け、その盲信の故に「殉教者」になった。このようなことがあり得るであろうか? どう考えてもそれは無理なことであろう。すると第3の可能性は、キリストは、その自己主張の通り、人となられた神であった、人類の永遠の救いのために来られた、という事実である。全人類の一人一人は、この人物の、『私を見たものは父を見たのである』との宣言に応答しなければならぬ。詐欺師と定めるか、精神病者と哀れむか、自分の救い主、真の神として信じるか。クリスマスは、このことを考え、心を定めるのに良いときである。(ミッシェン・ピエホ日本語教会牧師)